

M.ブーバー『我と汝における関係の世界についての考察』

—二つの根源語〈われ—なんじ〉〈われ—それ〉の世界—

Considerations of the word of the relationships between “Ich” and “Du” by M.Buber  
—The word of two etymological words “Ich and DU” and “Ich and Es”—

磯山光男\*

ISOYAMA, Mitsuo\*

要旨

M.ブーバーの著書『孤独と愛』—我と汝の問題—の中において展開される〈われ—なんじ〉および〈われ—それ〉の二つの根源語によって表される二つの世界は、二つの〈われ〉によって語られるのであるが、この二つの〈われ〉はまったく性質の異なる別の〈われ〉である。一つの〈われ〉は自らを意識することで、ひとや事物と明確な境をつくり、相手を〈それ〉として扱い、利用すること、何とかすることを意識する。そして、われわれは、ほとんどの場合この〈われ—それ〉関係の中で生活し、相手を〈それ〉として扱い生きている。しかし、この世界には相手を〈なんじ〉として扱い、相手を支配することも、何の期待や要求することもなく、ただ関係することだけを求める〈われ—なんじ〉の関係がある。これら二つの関係の仕方から生じる結果には如何なる違いがあるのだろうか。関係の世界とは如何なるものなのかを含めて検証する。

1. 本研究の背景と目的

本研究の目的は、M.ブーバーの著書『孤独と愛』—我と汝の問題—の中において展開される〈われ—なんじ〉および〈われ—それ〉の二つの根源語において、〈われ—なんじ〉の関係により、ひとまたは事物を〈なんじ〉と捉え、ただ関係を持つという土台に立つのか、あるいは、〈われ—それ〉という立場に立ち、ひとや事物を対象として捉え、経験し利用するという土台に立つのかという二つの根源語で表される世界観について考察し、関係の世界とは如何なるものであるのかを明らかにすることである。

2. 根源語に表される世界とは

『ひとは世界に対して二つの異なった態度をとる。それに基づいて世界は二つとなる。』  
これは、M・ブーバーの『我と汝』の書き出しである。このとてもシンプルな書き出しで始まる「二つの世界」の話は、とても奥が深く、難解ではあるが、人の心を惹きつける力を持った話である。この本は、何度も読み返すたびに、新しい発見があり、終わりが見つからない。しかし、この宇宙の神秘に迫るようなこの本は、人間として生まれてきた我々にとって、とても大切なことが書かれているのは確かなことである。

根源語の一つは「われ—なんじ」であり、もう一方は「われ—それ」である。そして、これら二つの根源語は

孤立した語ではなく、「われ—なんじ」「われ—それ」という複合語として語られる。つまり「われ」と語るとき、それは「われ—なんじ」の「われ」か「われ—それ」の「われ」を語っているのであって、「われ」だけが、独立して語られることはないということである。同じ「われ」を語っても全く別の意味の「われ」を語っているのである。

以上いずれの根源語も「もの」を示さず、「もの」と「もの」との関係を明らかにするに過ぎない。また、根源語は、それと関係なく存在している「もの」を示さない。しかし、根源語が話されると、それによって同時に現存がもたらされる。

根源語は、いずれも存在者自身によって語られる。〈なんじ〉という語が語られるときには、複合語の〈われ—なんじ〉が同時に語られ、〈それ〉という語が語られるときは、複合語の〈われ—それ〉という語が語られる<sup>1</sup>。ここでブーバーが語る二つの根源語〈われ—なんじ〉および〈われ—それ〉とは、あくまで比喩的な意味で使われているのであって、実際に〈われ—なんじ〉または〈われ—それ〉が使われた場合を語っている訳ではなく、〈われ〉に対する〈なんじ〉と〈それ〉の関係の対比として使われているに過ぎない。また、〈われ〉は〈なんじ〉を語る〈われ〉と〈それ〉を語る〈われ〉とは、同じ〈われ〉であっても全く性質が違い、それぞれが別の〈われ〉を意味しているのである。

\* 武庫川女子大学大学院文学研究科 (Graduate School of Letters, Mukogawa Women's University)

そして、確かなことは、それぞれの根源語は存在者によってのみ語られるということであり、〈なんじ〉を語る〈われ〉も〈それ〉を語る〈われ〉も確かに現存するのである。

この現存する〈われ〉は二つの全く別な〈われ〉として存在し、そのいずれの〈われ〉が根源語を語るかによって〈われ—なんじ〉または〈われ—それ〉に必然的に分離するのである。それは〈なんじ〉を語る〈われ〉とは、主体としての〈われ〉のことであり、また、それは人格としての〈われ〉のことである。この主体としての〈われ〉は、常に関係の中に存在し、全人格を傾倒して〈なんじ〉なるものと関係—体化する。

これに対して「われ—それ」の〈われ〉は、主観としての〈われ〉であり、ものを経験し利用するための〈われ〉である。そして、この〈われ〉は、自分という自意識を通してものを認識する〈われ〉であって、決して全人格を傾倒して〈それ〉と関わることはなく、常に〈それ〉とは距離を置き、相手を経験し利用する。

これまでのことから、根源語とは世界を二つに分ける言葉であり、そのどちらの土台に立って語りかけるかによって世界は二つに分かれるのである。

〈われ—なんじ〉が全人格を傾倒してはじめて語ることができるのに対し、〈われ—それ〉という根源語は、全人格を傾倒して語るができない。ひとが〈われ〉というとき、そのひとの語る〈われ〉は現存する。さらにひとが、〈なんじ〉あるいは〈それ〉というとき、二つの根源語における、それぞれの〈われ〉もまた現存する。

ひとが根源語を語る時、そのひとは、その言葉のうちに入り、相手に語りかける。そして、世界を〈われ—なんじ〉の関係の世界と〈われ—それ〉の経験の対象となる世界に明確に分けるのである。

それでは、〈それ〉の世界と〈なんじ〉の世界とは、それぞれどのようなになっているのだろうか。

人間の生活は他動詞の領域のみで営まれるものではない。それは、ある〈もの〉を目的とする活動ばかりで成り立っているのではない。われわれは、何かを意識する。また、何かを想像し、志向し、体験し、思惟する。しかし、人間の生活はこのようなこと、或いは、これと類似したことだけで、できているのではない。このようなこと、或いは、これと類似したことが、集まってこしらえ上げているのが、〈それ〉の世界である。

ところが、〈なんじ〉の世界はこれとは全く違った基礎の上に立っている。〈なんじ〉を語る場合、それを語るひとにとっては、何ものも対象として存在していない。なぜなら、一つの〈もの〉が存在するところには、必ず他の〈もの〉が存在するからである。〈それ〉は他の〈それ〉と境を接し、他の〈それ〉に限定されてはじめて〈それ〉として存在するのである。これに反して、〈なんじ〉を語

る場合、〈もの〉は存在しない。なぜなら、〈なんじ〉は〈なんじ〉を限定する何ものも、持たないからである。

〈なんじ〉を語る時、それを語るひとには〈もの〉は存在しない。いや、何も存在しない。〈なんじ〉を語るひとは、まさに「関係の場」に立つのみである<sup>2</sup>。

われわれは、一本の木とも関係を結ぶことができる。しかし、そのためには、関係を結ぶ意志があり、それと同時にわれわれが、恩恵の励ましを受けることが出来た場合に、一本の木に対しても関係を結ぶことは可能になる。この場合、われわれは、一本の木を部分的に見ることも、利用することも出来ない。それは、一本の木がまさに〈なんじ〉となることを意味している。

われわれが、何かと関係を結ぶということは、その何かの一部を取りだして分析したり、利用したりすることとは無縁となる。それは〈なんじ〉となるものは、ともに境を持たず、彼や彼女との全ての繋がりを断ち切って、自己のうちに全てを宿すことのできるものを指しているからである。

〈なんじ〉となるものは、経験の対象とはならず、われわれと面と向かって相対し、われわれが働きかければ、同じように、われわれに働きかけ返すことによって、関係するものである。

これらが、〈それ〉の世界と〈なんじ〉の世界の違いであるが、これらをもっと分かり易く噛み砕いて説明するならば、〈それ〉の世界は何とかしよとす世界であり、〈なんじ〉の世界はただ受け入れる世界である。

### 3. 直接的関係と間接的關係

これらの M.ブーバーの主張は、〈なんじ〉になるものは経験の対象にはならず、客観的に整理、分析できるようなものは〈なんじ〉にはなり得ないということである。そして、〈われ—なんじ〉〈われ—それ〉はそれぞれ相反する二つの関わり方をもつということである。

その関わり方とは、二つの根源語で表される〈われ—なんじ〉〈われ—それ〉における関係の関わり方であり、そのうちの〈われ—なんじ〉が直接的関係であり、一方の〈れ—それ〉は間接的關係であるとブーバーは主張している。

それでは、なぜ〈われ—なんじ〉が直接的関係になり、〈われ—それ〉が間接的關係になるのであろうか。乳児は、母親の胎内にいるときに母親と直接的関係であろうことは理解できる。それでは、乳児として、母親の胎内を離れ、この世に誕生してからはどうであろうか。

乳児は、母親の胎内から外の世界に誕生したとしても、はじめから、〈われ〉という認識は持たないし、持つこともできない。なぜなら、胎内にいるときに乳児には〈われ〉という意識が存在していないからである。したがって乳児が〈われ〉という意識を持ち始めるまでには、こ

の世に誕生してからしばらく時間がかかることは予想される。

乳児が誕生間もない時期の〈われ〉という意識を持たないときには、乳児には〈なんじ〉という意識しかなく、母親や周りにいる人々、また自分の周りに存在する事物すべてに対して、胎内にいるときのように〈なんじ〉と呼びかけ関係を持つようとする。このとき、乳児は相手や事物を認識する以前に先ず関係を持つようとするのである。それは、生まれたばかり乳児には〈われ〉という意識が存在しないからである。

ブーバーは、乳児は、まず始めに事物を認識するのではなく、まず、最初に関係を持つようすると語っているが、まさに、このことが、そのことを裏付けている。

つまり、乳児は〈なんじ〉と呼びかけ、〈なんじ〉と呼びかけられる。このことを通じて、乳児は事物と関係を相互に結び、〈われ—なんじ〉の関係を確立する。この場合の〈われ〉は乳児が自分という存在を意識していない状態での〈われ〉であり、乳児が母親に対し、或いは事物に対し、〈なんじ〉と呼びかけることによって生じる複合語の〈われ—なんじ〉における〈われ〉のことである。

つまり、〈なんじ〉と呼びかけることによって必然的に現存する〈われ〉のことであり、乳児には〈われ〉という意識は存在しないが、〈われ〉は確かに現存するのである。

乳児は胎内にいるときは、母親または宇宙との自然な結びつきを〈なんじ〉と呼びかけたり、呼びかけられたりすることによって〈われ—なんじ〉の関係を成り立たせている。

その後、乳児として外の世界に誕生する訳であるが、誕生直後は、母親の胎内での関係をそのままにして、自然に外の世界に対して〈なんじ〉と呼びかけることによって、乳児は〈われ—なんじ〉の関係を成立させることが出来るのである。

この場合における〈われ—なんじ〉の〈われ〉は、〈われ〉という認識なしの〈われ〉のことであり、人格そのものが事物と直接に関係を結ぶ関係の仕方である。

乳児や幼児が物凄い勢いで、外の世界を理解し、事物と次々に関係を結び、多くのことを理解していくことができるのは、まさに事物を経験の対象として認識するわけではなく、ただ、人格と事物が全体を通して直接関係を結ぶからできるのである。そして、この関係の結び方を直接的関係というのである。

これに対して、間接的関係とは、人格と事物が直接結びつく関係の仕方以外の関係をいう。つまり、人格と事物の間に、〈われ〉または〈自分〉という自意識があつて、〈われ〉または〈自分〉を先ず意識してから、事物やひとを認識する関係の仕方であり、事物やひとを経験の対象にする関係の結び方である。

例えば、親が子どもに対し、子どもを何とかしよう、または、教師が子どもに対して、何かを教えようとする関係の仕方は、先ず〈われ〉、または〈自分〉という自意識があり、その後、子どもを対象として認識する。

この場合は、親や教師と子どもの関係は間接的関係になり、必然的に子どもの一面しか見えない。その結果として、親や教師は子どもと部分的に関わることしか出来ないのである。まさに、〈われ—それ〉の関係となってしまうのである。このような場合の〈われ〉は、〈それ〉以前に存在し、〈われ〉を先ず意識し〈われ〉を通じて〈それ〉を対象として認識する。

このような〈われ—それ〉の関係は先ず、はじめに、自分があり、自分というフィルターを通して事物を認識し、事物を経験、利用しようとするのである。このような関わり方を間接的関係という。

〈われ—なんじ〉における直接的関係は〈われ〉を通さず、人格が直接事物と関係するため(言い換えれば〈われ〉は〈なんじ〉と一体の関係になるため)〈われ〉は〈なんじ〉と全人格を傾倒して関わるができる。

これに対して〈われ—それ〉の間接的関係は人格ではない自意識の〈われ〉を通して事物と部分的に関係するため、全人格を傾倒して事物と関わるようなことは出来ない。その結果、〈われ—それ〉の関係では、事物を全体的に見ることは出来ず、部分的にしか認識することができない。

それに反して、〈われ—なんじ〉の関係においては全人格を傾倒して事物と関係を持つため、事物を全体的に理解する。事物を全体的に理解することが出来るために、事物は肯定され、そのことにより〈われ—なんじ〉の関係が確立される。ブーバーは以下のように語っている。

全体を否定するものは、自分と向き合っている相手に根源語を語るができない。なぜなら、根源語を語るものは常に、呼びかけた相手を肯定しなければならないからだ。だから、全体を見て、それでも、それを否定するものは、相手か自分か、いずれか一方を否定しなければならない。われわれは、この切羽詰った関所に来たときに初めて「関係する」ということが、自分と相手と双方を同時に「肯定する」ことだということを知るのである。また、それを知ったとき初めて関所の重い扉は開かれるのである。相手を一途に憎悪するものは、愛も憎しみもない人間より、はるかに関係に近づいていると言える<sup>3</sup>。

〈われ—なんじ〉の関係は、自分と相手の双方の全てを肯定するときに可能となる関係であるとされるが、そのようにお互いの全てを肯定するためには、人格と事物が直接関係することが必要であるとされている。つまり、〈われ—なんじ〉における〈われ〉とは、まさに人格のことであり、人格を通して関わることでしか全体を肯定

することが出来ないことを示している。

これに対して、〈われ—それ〉における〈われ〉は、肉体としての自分であり、自分というフィルターを通して世界を見る〈われ〉のことを指しているのである。〈われ—それ〉の関係は〈われ〉または〈自分〉という自意識を通して世界と関わるために、人格が直接、ひとや事物と関わらず、間接的にしか関わるができないため、全体を通して肯定できず、部分的にしか肯定することができない。

つまり、われわれが事物と直接的関係を結び、〈われ—なんじ〉の関係を結ぶためには、自分という自意識または肉体としての〈われ〉という意識を持たず、直接的に事物やひとと関係を結ばなければならない。そして、事物と直接関係を結ぶことが出来るのは人格ということになる。このことは、生まれたばかりの〈われ〉という意識を持たず〈なんじ〉として事物に関わることしか知らない乳児の関わり方と同じである。

そして、人格としての〈われ〉は〈われ〉という意識を持たずに〈なんじ〉と直接関係するのであるが、これはもっと端的に言えば〈なんじ〉という呼びかけが先ず最初にあるということである。つまり、〈われ〉が〈なんじ〉そのものなのであり、〈なんじ〉しか存在しないので全体を通して関係できるのである。

#### 4. 主体としての〈われ〉と主観としての〈われ〉

これらのことから関係するとは、人格としての〈われ〉が〈なんじ〉となるひとや事物と直接関係することをいうのであるが、そのことは言い換えると〈なんじ〉となるものを在りのままに受け入れるということになる。一切の目的を持たず、ただ、相手と関係するということは、相手を在りのままに受け入れることであり、そのことによって相手を〈なんじ〉と呼びかけることができるのである。ブーバーは以下のように語っている。

〈われ—なんじ〉の根源語は、自分の全身全霊を傾けて語るより他に方法がない。わたしが、精神を集中して全体的な存在に溶け込んで行くのは、自分の力によるものではない。しかし、そうかといって自分なしでできるものでもない。まことに、〈われ〉は〈なんじ〉に出会うことによって始めて、真の〈われ〉になるのである。わたしが〈われ〉となるに従って、わたしは、相手を〈なんじ〉と呼びかけることができるようになるのである。すべての真実なる「生」とは、まさに出会いである<sup>4</sup>。

ここで、言われている“〈われ〉は〈なんじ〉に出会うことによって始めて、真の〈われ〉になるのである。わたしが〈われ〉となるに従って、わたしは、相手を〈なんじ〉と呼びかけることができるようになるのである”とは、〈われ〉が主観としての〈われ〉から主体としての〈われ〉に変わり、〈われ〉という自意識なしに、人格と

しての〈われ〉が直接〈なんじ〉と関係を結べるようになっていくということを示しているのである。

〈われ—それ〉における〈われ〉はしっかりと〈われ〉という意識を持ち対象となるものを認識することによって、自分自身の世界を知るのである。しかし、それは、対象となるものや自分を周りの対象となる事物やひとを比較、分類、検討することや経験を通じて主観として認識しているに過ぎず、それはもっと分かり易く言えば、自分なりの見方や考えによって認識したものであって真の世界とは関係ないということである。

これに反して〈われ—なんじ〉の〈われ〉は主体としての人格が直接相手と全体を通して関係する。このことは、自分の見方や都合によって相手を認識するわけではなく、相手そのもの全てを受け入れ理解することである。

主体としての人格は〈われ〉そのものを眺め、主観としての〈われ〉は、わが何々と関わり合う。主体としての人格は自らを意識せず、直接相手と関係を結ぶが、主観としての〈われ〉は自らを意識し、相手を利用するための手段を弄する。しかも直接相手とは関わらず距離を置いてしまう。その結果として、〈われ—それ〉における〈われ〉は相手と部分的にしか関わらず、相手の一面を知るのみである。

#### 5. 二つの根源語〈われ—それ〉〈われ—なんじ〉がもたらすもの

ブーバーは文化の発展について以下のように語っている。

個人の歴史と人類の歴史とは、例え如何なる点で常にその本質を異にしようとも、少なくとも次の一点においては一致している。それは、すなわち、いずれの場合においても「歴史は〈それ〉の世界の拡がって行く様を示す」ということである。

個人の生活を比較できるのは、民族生活よりは、むしろ文化生活だといえよう。しかも、他から全く孤立した文化ならいざ知らず、多少なりとも文化的交流があるところでは、一文化は、すでに、それ以前から存在してきた他の文化の影響を受け、また、それと同時に、その文化に属する〈それ〉の世界も引き継いでいるのが常である<sup>5</sup>。

つまり文化の発展は〈われ—それ〉の世界の拡大の様を表すとブーバーは語っている。〈われ—それ〉の確かな現実性によってひとは認識を深め、多くの経験を通して必然性の確かさを確信してきたことは確かである。

しかし、世界はこのように経験の対象となるものによってのみできているわけではない。

われわれが生きていく上で、この確かな現実性は必要であるが、〈われ—それ〉の世界にのみ生きていたとしたら、全ては無に等しいとブーバーは言っている。それは、

どうしてだろうか。われわれが感じる確かな世界である〈われ—それ〉の世界は間接的関係の世界であり、われわれの真の世界とは無関係なのである。ブーバーは現実とは〈なんじ〉が現存し、〈なんじ〉とともに分かち合ったものが現実であると語り、〈なんじ〉の存在しない〈われ—それ〉の世界は全て過去の世界だと語っている。

われわれが〈われ—それ〉の世界でのみ生きて行くとしたなら、われわれは過去にのみ生きることになる。たとえ文化が大いに発展しても、認識や経験が豊富になったとしても〈なんじ〉の現存しない世界は過去の世界であり、今の自分には関係のない世界になってしまうのである。

われわれが今を生きるために必要なことは〈われ—なんじ〉の関係を結び〈なんじ〉とともに分かち持つ現実生きることである。そのために必要なことは主体としての〈われ〉によって〈なんじ〉と関係を結ぶことである。われわれは〈なんじ〉との出会いによって真の〈われ〉となって行けるとブーバーは語っている。

〈なんじ〉と呼びかけることで〈なんじ〉と一体になり、〈われ—それ〉の〈われ〉では得ることのできないものを多く得ることが出来るとブーバーは語っている。目的を持って〈なんじ〉と関係することはできないが、ただ〈なんじ〉と関係を結ぼうとするだけで神秘は表れるとしている。

〈なんじ〉と関係を結ぶ〈われ〉は〈なんじ〉を入れる器のような存在である。〈われ〉は〈なんじ〉のすべてを入れる空の器であり、何も入っていない。ただ、〈なんじ〉の全てを受け入れる器であり、何の目的も手段も持たない器である。器の中に〈なんじ〉が入ることによって〈われ—なんじ〉の関係は成立し、器に料理が盛られることによって料理は完成するように、〈われ—なんじ〉の関係が成立できる。

ブーバーは、真に生きるとは、〈なんじ〉と分かち持つ現実に生きることであり、そのことによるのみ生きる活力は生まれ、真の主体性を発揮できると語っているが、料理がきれいな器に盛られることによって料理としてひとに喜んで食べてもらうことができる。これは、〈なんじ〉が逆に器になり、〈われ〉が料理なることもあり、相互にこのような関係の中で〈われ—なんじ〉の関係を続けることが可能となる。

このような関係が直接的関係であり、分離した主観としての〈われ〉は器の中に入っている「もの」に過ぎず、自分にあった料理を受け入れるのみである。

ここまでの研究で明らかにされることは〈われ—なんじ〉の世界は無条件で在りのまま受け入れる「愛」の世界であり、〈われ—それ〉の世界は、条件付きでひとや事物を受け入れはするが、距離を置いてしまう「恐れ」の世界のように映るのであるが、それは検証できていない。

#### —注—

- (1) M.Buber 『「孤独と愛」—我と汝の問題』(野口啓祐訳) 創文社 1958. P1
- (2) M.Buber 『「孤独と愛」—我と汝の問題』(野口啓祐訳) 創文社 1958, P3
- (3) M.Buber 『「孤独と愛」—我と汝の問題』(野口啓祐訳) 創文社 1958, P24
- (4) M.Buber 『「孤独と愛」—我と汝の問題』(野口啓祐訳) 創文社 1958, P16
- (5) M.Buber 『「孤独と愛」—我と汝の問題』(野口啓祐訳) 創文社 1958, P55

#### —参考文献—

- (1) M.Buber 『「孤独と愛」—我と汝の問題』(野口啓祐訳) 創文社 1958